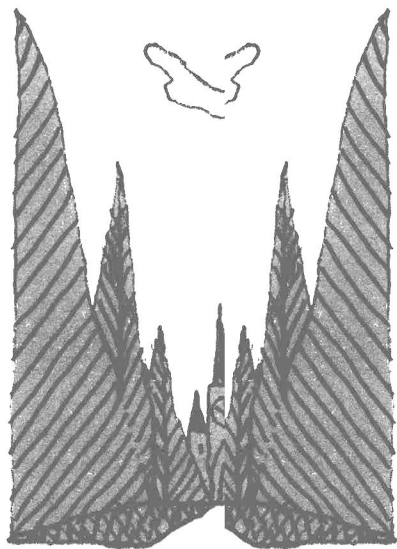


おいで、初恋

森村

桂

講談社



ta.

おいで、初恋

1968年2月4日 第1刷発行

1968年3月10日 第2刷発行

著者 森村 桂

<同じ著者によって>
ふたりは二人 (講談社刊)
結婚志願 (講談社刊)
チャンスがあれば (講談社刊)
違っているかしら (オリオン社刊)
天国にいちばん近い島 (学研刊)

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

電話 東京 (942) 1111 (大代表)

振替 東京 3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定 価 330円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1968

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

おいで、初恋
目次

アトリエのふたり

7

新しいキャプテン

26

新しい風をふきこもう

43

ナッツの恋

57

その予算まった！

78

ナイトは、信長の子孫

92

文化祭

115

私はキャプテンだ

おじさん

桜小路正子の孤独

六年前の恋

桜小路正子の恋

しもばしらの音

ついに合同公演

新しい仲間

132

148

168

185

198

210

220

238

装幀・カット
宮田武彦

おいで、
初恋

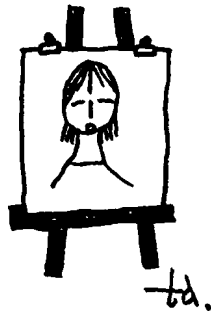
アトリエのふたり

その日、私はいつものようにパンと牛乳を買って、戸山ハイツの丘の見える学校の裏庭のアトリエに向った。

「シコメ」

古いアトリエの木造のベランダには、もうビジヨが待っていた。私は東組、ビジヨは西組でクラスこそ違うが大の親友だ。ビジヨはこの修学院女子部に、高等科になって入って来た。私は初等科からである。

彼女と知りあったのは、一年前の高等科一年になった初夏の頃だった。演劇部に入った私は、旧館の演劇部室に行ったものの、まだ誰も来ていないので、少し散歩をすることにした。そしてこの裏庭を歩いている時、ベランダのあるアトリエの中に、人の姿があるのを発見した



のだ。アトリエの中では、大きな石膏像に向って、髪の毛の長い色の黒い生徒が一心にエンピツを動かしていた。私はベランダによじのぼると、そっとガラスのドアのすきまから忍びこんだ。

彼女はまだ気がつかないのか、横顔のまま、振り向かなかった。

私は彼女の左の手もとに、食べかけの食パンのへりがあるのを発見した。とたん、ひどくおなかがすいてるのに気がついた。私はいつものいたずらっ気を起して、そっとそのパンに手を出した。彼女はまだ気がつかない。私はパンをひきよせ、すでにほじくってあったように、中のやわらかいところをほじくって口に入れた。おいしい、また口に入れる、そして私はつい口に出してつぶやいた。

「おいしい」

と、はじめて彼女が振りむいて立ち上った、立ってみると驚くほど背が低く、ノッポの私の肩ぐらいしかなかった。私はいった。

「ごちそうさま」

と、彼女は途方にくれたようにいった。

「困るわ、消しゴムに使うのに」

「消しゴム?!」

彼女はムッとしたように私からミミだけになってしまった食パンをとりかえすと、やっこのことで残っているやわらかいところをほじくり出して、今書いていたところにゴシゴシとやっ

た。と、エンピツだと思っていた黒い棒、コンテで描かれたそれが、きれいに消えてしまつたではないか。まさに消しゴムなのだ。

「うわ、申し訳ない、ごめん遊ばせ、許して」

といったものの、私は彼女の途方にくれた顔を見ていると、何が何でも、消しゴムを返さなきゃならないと思つた。そしてあわてて外にかけ出して行き、校内のパン屋さんにとびこんだ、

「パン屋さん！」

「なあに、もうおしまいよ」

パン屋の太ったネエさまたちは、パンの木箱をオート三輪に入れているところだった。

「待って、何かない、パン」

「ないわ、もう全部売り切れ。あ、だめよ、箱くずしちゃ」

私はあわただしく木箱をあけてまわる、ない、ない、あ、あつた、大きな四角い罐の中に、はじっこのところばかり切つて入れてある。

「これ、ちょうだい、これ」

「はじっこよ、こんなのまじわ」

「いいのよ、厚ぼつたいの探すから。でもこんなに、はじっこばかりどうするの」

「パン粉作るのよ、黒いムシパンだつて出来るのよ」

「あら、私たちのピンハネして、商売するなんてずい」

「あなただつて、そこからまたピンハネする気じゃない。よし、口どめ料として、このはじっこ二枚でジャムサンド作ってあげるわ」

「ありがたいけど、今はそれどこじゃないの、ゲイジツの為よ。人生はパンだけじゃない」

「何よそれ」

「あ、このはじっこ二つもらった、バイバイ」

私は比較的中味の多い切れを二つみつけると、またアトリエにとってかえず。アトリエにはさっきのゲイジツ家が、まだ同じ顔つきで描いている。まったく親しめない奴だよ。人が来たら振りむいてニコリぐらいすればいいのに。そのかわりに彼女はまた邪魔がきたかという風に振りむいた。

「はい、これ、さっきはごめん遊ばせ」

「ありがとう」

彼女は、はじめて笑顔をみせた。しかし、またすぐもとの姿勢にもどると、私を無視してしまった。

この日以来、私は演劇部のない日は、授業が終ると、せつせとアトリエに通った。このアトリエは、週に一回の美術部がない日は、いつでもこの吉村いく子が占領しているらしかった。

彼女は有名な日本画家の弟子で、芸大の日本画科を受けるのだといっていた。彼女の美人画は見事だった。ある日のこと、

「わあ、きれい」

彼女の描き上げた天女の絵に感嘆すると

「似てるでしょ」

吉村いく子は突然いった。

「え」

彼女は、その天女の画を、自分の顔のそばに近づける。

「？」

私は、何のことやら解らない。

「ほら」

彼女はまた、自信たっぷり、天女と同じ口もとで笑ってみせた。

「うん、似てる」

やむなく、私は相槌を打った。正直一本ヤリで通ってる私としては、こんな辛いことはないのだが。と、吉村いく子はいった。

「似てる？　じゃあ、私をこれからピジョってよんで」

「ピジョ?!」

「うん、美女よ」

それからというものの彼女は何度吉村さんとよんでも返事をしなくなった。仕方なく、ピジョ

とよぶと、

「はい」

と即座に返事をし、私にむかってこういった。

「なーに？ シコメ」

てんで頭にきはしたけれど、何となく彼女とはウマがあつた。私はビジヨと友だちになつたのがうれしかった。

それまで私はひとりぼっちで時間をもてあましていた。演劇部は秋の公演まで間があるから、今のところ週一回読み合せがあるだけだったし、それも新人のうちでもあまり期待されない私は、あまり用がなかった。だから私にとって、ビジヨという時間が、一番充実した落着いた時間だった。べつに何の話があるわけでもなかった。ただ、ビジヨの描くそばで、自分も真似して写生をしたり、似顔絵を描いたりしてゐるのだ。静かで心楽しかった。ビジヨにも友だちがいらないらしい。

私は成績もいい方ではなかったし、ちょっとずつとんきようで変り者だったから、クラスの中であまり歓迎されていなかった。私はみんなの夢中になっている映画スターや歌手、野球選手にはまったく興味がなかったし、こんど誰かがねだらうとしているパーティドレスや、日曜日のドライブとは、一向に縁がなかった。みんなの話は、私の生活とあまりにも遠かった。

昭和二十四年の四月、むかし皇族や華族さんたちのためにたてられたこの修学院初等科の四年に、私が編入して来た時、父の小説は売れていた。

父母はこの学校が、戦後かかげた、「精神的貴族を養う学校」という院長のことばにまいて私を入れたのだ。当時は二部教授だったりでいい学校がなかった。クラスメートたちは財閥を別として、華族さんや名門の家はやっとたちなおった家が多く、招んだり招ばれたりしてもヒケをとることはなかった。お誕生会やお節句で、西大久保の広い庭を持つ小さいけれど、赤い屋根にツタのからまった白い窓の私の家は、いつもにぎやかで明るかった。

しかし、女子中等科へ入る頃から、父の小説は売れなくなつた。一方クラスメートたちは接収された家が帰ってきたり、お父さんの会社がもち直したりする一方、人形やプラスチック製品など、物資が豊富になつた。そのためいままでのきびしい生活の反動で、クラスメートの話題は日に日にハデなものに変わっていった。また初等科の頃は、元華族や名門の家がほとんどで、割に落着いていたのだが、この学校が、そういう学校としては有名で、お嫁入りにいいことから、不動産屋や土地成り金の娘が、続々と入つて来た。彼女たちは、「あそぼせ」とか、あなたという言葉のかわりに使う「この方」という言葉をいち早く吸収し、態度も、おしとやかぶる傾向が多かつた。その上彼女たちは、おこづかいをたくさん持っていた。身につけるものも高価なものが多かつた。

話題はいつのまにか新しい洋服のこと、自動車や別荘の話に変わっていた。新しい商品や珍ら

しい外国品は、競って誰かが身につけた。ピンクのプラスチックのお裁縫箱がはやり出すと、「家はこれなきや新しいの買ってくれないのよ」

と行って、自分の古い赤いお裁縫箱をピシッと割ってみせたり、新しい靴がはやりだすと、「こんな靴いやだわ」

とっては、わざと、まだ新しい靴をコンコン石だたみにたたきつけていたためたりした。

そんな時、ついとそばを離れるのが私のくせになっていた。今まで一緒だったクラスメートが、まるで遠くに行ってしまったのが悲しかった。

私はまだ、時計はもちろん、万年筆さえ持っていなかった。制服は仕立直しだし、靴はもう、修繕の余地さえない。いっぺんだって親に何かねだったことはない。

「お母さん、あれがほしい」

長いことそんなことを声に出していったことがあっただろうか。初等科の時は、何がほしいなんて思ってもいなかった。しかし、今、みんなの持っているもの、靴にしろ、赤い革の靴にしろ、私の持つてるボロボロのズックじゃない、いや、チェックのハンケチ一枚でいい、どれ一つでも、私はほしかった。うらやましかった。

学校に通えるだけで有難いんだ。よその学校には私より貧乏な人はいくらでもいる。みんなが恵まれすぎているだけなんだ。そう思いながらも、やはり、みんながうらやましかった。みんなが自分と同じならがまんも出来る。しかし、自分だけが持つてなくて、しかも、二三年前